

No. 1169

和傘のふる里

—岐阜・加納—

降る雨に開くとブーンと鼻をつく油のにおい、傘をたたく音、そして、しっとりと落ち着いた、味わいを見せる和傘。岐阜市加納——。中心街から少し、はずれた、このあたりは和傘の生産地である。しかし洋傘の普及でちょう落の一途をたどり、現在では、13の業者があるだけだ。

和傘づくりのほとんどは家内工業、坂井田さん一家もそのひとつ、家族全員で傘づくりを長年続けている。加納傘の歴史は古い、340年前、加納藩主となった、松平丹波守光重が明石から傘職人をつれて入国、傘づくりを奨励したのが始まりだという。ここの傘づくりが今も残っているのは昔と変らぬ手づくりの味と、技術的に精巧で、見かけが美しく丈夫だからだという。和傘は最初に竹を削り、いくつもの工程を踏み最後にうるしを塗って仕上げられる。一本の傘を作るのに25日は優にかかる。うっとりしい梅雨の季節、「夜目遠目カサのうち」と古い言葉がある様に着物姿の女性の美しさを引き立たせるのも和傘である。

住みよい環境を

空の騒音、海の汚染、大気汚染、公害に苦しむ人々は今も後を絶たない。6月5日から始まった環境週間のさ中、全国から公害の被害者団体64団体が東京に集まり、総決起集会が開かれた。

決起集会のあと、被害者代表らは「公害被害者の声を聞かずに環境行政が進められるのか」と環境庁をはじめ厚生省、運輸省など訪れ、要請行動を繰り広げた。

運輸省では大阪国際空港公害訴訟団、福岡空港公害訴訟原告団の代表約150人が押しかけ、「国は大阪国際空港公害訴訟の上告を即時取り下げよ」などと要求した。

厚生省では、スモン、カネミ油症、予防接種事故の各被害者が「三つの事件はともに怠慢な厚生行政の中で起ったものだ。患者の早期救済をせよ」と追求した。環境庁・小沢長官は「私たちは公害が過去のものと受けとっていない。皆さんに代ってがんばる」とあいさつ。しかし、具体的な被害の実態については知らないことが多く、公害被害者の反発を買った。